

薬史レター



第54号

日本薬史学会

JSHP

2009年10月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

日本薬史学会 2009(平成 21)年会のご案内

—金沢年会へのご参加をお待ちしています—

年会長 徳久 和夫(石川県薬剤師会 会長)

日本薬史学会 2009 年会を、来る平成 21 年 11 月 7 日(土)~8 日(日)の両日にわたり、金沢の地、金沢大学(角間キャンパス)自然科学本館において開催します。

本年会は、一日目:一般講演(口頭・ポスター)、特別講演。二日目:医薬史跡探訪、市民公開講座の二部構成で行われます。

一般講演は 16 題を数え、内容も年々多様化していることが伺われ、充実した討議時間を確保するために、一部ポスターセッションを採り入れました。貴重な発表をお申し込みいただいた会員各位には深甚の敬意と感謝を申し上げます。

旧藩時代より『加賀は江戸、大坂、京都に比肩する学問の府』と称せられ、伝統文化と学問の城下町として今日に至っています。この年会を準備するにあたり、地方色豊かな中に金沢らしさを十分に感じ取っていただけるよう心がけてまいりました。

【一日目】特別講演Ⅰは、石川県立歴史博物館学芸課長の本康宏史先生に『加賀の奇才からくり師大野弁吉の医薬知識』と題して、加賀の平賀源内と謳われた弁吉のこれまでほとんど知られなかった医薬に関する一面を、また、特別講演Ⅱは金沢大学名誉教授板垣英治先生に『スロイスとホルトルマンの基礎医薬学講義』と題して、明治初期石川県が相次いで招聘した二人のオランダ人医師が、当時としては最新の医薬学基礎理論を金沢医学校において教えていたことを、それぞれご講演いただくことになっています。

シャトルバスで移動しての懇親会では、山海の食材に恵まれた金沢のご馳走で交流の輪(和)がいつそう広がることを願っています。

【二日目】市民公開講座はメインテーマを『加賀藩と医薬』とし、特別講演には金沢大学大学院医学系研究科特任教授鈴木信孝先生の『伝統薬に光を』で、アメリカで進む植物性医薬品についての最新情報と、石川考古学研究会米澤義光先生の『加賀三味薬と金沢図屏風に描かれた宮竹屋』では、幕末期金沢城下町をリードした薬種御三家のひとつ宮竹屋に初めてフォーカスされた研究成果を、ご講演いただくことになっています。

一方、医薬史跡探訪では、関心の高いキンストレーキの金沢大学医学部記念館を始め、金沢薬学発祥とされる卯辰山を借景に林鐘庵(北陸大学教養別館)での抹茶ブレイク、奥の細道芭蕉ゆかりの宮竹屋茶室是庵(料亭つば甚)での食談(昼食)などなど、金沢ならではのご案内をさせていただきます。

秋の城下町金沢をご堪能ください。会員各位、多数のご参加をお待ちいたしております。

日本薬史学会 2009 年会(金沢)のご案内

日 時：平成 21 年 11 月 7 日(土) 11:00～8 日(日) 16:00
年 会 長：徳久 和夫(石川県薬剤師会会長)
会 場：金沢市 金沢大学自然科学本館(角間キャンパス)及び金沢都ホテル
主 催：日本薬史学会・石川県薬剤師会
協 賛：北陸医史学会・金沢大学・北陸大学・東洋医学会
後 援：日本医史学会

特別講演Ⅰ：『加賀の奇才 からくり師大野弁吉の医薬知識』

文学博士 本康 宏史(石川県立歴史博物館学芸課長)

特別講演Ⅱ：『スロイスとホルトルマンの基礎医薬学講義』

金沢大学名誉教授 板垣 英治

一 般 講 演：口頭発表 (1 演題 15 分；発表・質疑応答を含む) 下記プログラム参照
ポスター発表(1 演題 5 分；発表・質疑応答を含む)

学都金沢医薬探訪： 下記プログラム参照

市 民 公 開 講 座：『加賀藩と医薬』 下記プログラム参照

年会参加費：会員 3,000 円 非会員 5,000 円 学生 1,000 円

懇 親 会：講演終了後(18:00～19:30)

会 場：金沢都ホテル(金沢市此花町 6-10 金沢駅東口から徒歩 2 分)

会 費：9,000 円(学生 3,000 円)

学都金沢医薬探訪：会費；6,000 円

市 民 公 開 講 座：無料

※参加費は、すべて当日、受付にて徴収いたします。

日本薬史学会 2009 年会(金沢) プログラム

【第 1 日目】 11 月 7 日(土) (金沢大学角間キャンパス)

受付開始(10:00～)

開会のあいさつ(10:50～11:00)

日本薬史学会 2009 年会(金沢)年会長 徳久 和夫

特別講演Ⅰ(11:00～12:00) 『加賀の奇才 からくり師大野弁吉の医薬知識』

文学博士 本康 宏史(石川県立歴史博物館学芸課長)

理事・評議員合同会議(12:00～13:00)

特別講演Ⅱ(13:00～14:00) 『スロイスとホルトルマンの基礎医薬学講義』

金沢大学名誉教授 板垣 英治

一般講演発表(16題)

口頭発表(14:00～16:15)

1. 広田弘毅と星一の交遊 三澤 美和(星薬科大学薬理学教室)
2. 歴史のなかのアポセカリ(二) -ロマン派詩人ジョン・キーツ-
柳澤 波香(青山学院大学・津田塾大学非常勤講師)
3. 医薬品再評価の歴史 高橋 春男(エーザイ(株)臨床研究センター)
4. 日向薬(くすり)事始め(その8)
-日向出身の、小石元瑞(京都)および楢林鎮山、栄哲(長崎)門下生とその周辺-
山本 郁男(九州保健福祉大学薬学部 九州保健福祉大学 QOL 研究機構)
5. 大阪道修町における試薬業界の変遷-試薬業の黎明について- 宮崎 啓一(三栄化工(株))
6. 日本のドラッグストアの歴史に関する一考察(4)
-日本の医薬品販売の変遷とドラッグストアの役割- 佐藤 知樹(日本医歯薬専門学校)
7. 「無名異」再考:御献上無名異と「見宜堂古林正貞先生 醫學入門本草(写本)」
成田 研一(島根県済生会高砂病院 薬剤部)
8. 薄荷脳(メントール)の薬香としての使用の変遷 多胡 彰郎(長岡実業(株))
9. 日本における薬剤師教育の祖・藤田正方をめぐって 川瀬 清(日本薬史学会)

ポスター発表(16:15～16:50)

1. 『写真で見る韓国近現代医療文化史 1879-1960』中の薬学史についての記載
石田 純郎(中国労働衛生協会)
2. 古代インドの薬学史-I 奥田 潤(名城大)
3. 日本における薬剤経済学評価の歴史:臨床試験から使用実績調査まで
赤沢 学(金沢大学医薬保健研究域薬学系国際保健薬学)
4. わが国のアミノ酸系医薬品開発 50 年の変遷(その2) -アミノ酸誘導体・非天然型アミノ酸製剤-
荒井 裕美子((財)日本医薬情報センター(JAPIC))
5. 西欧中世盛期の薬草書～ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの宇宙観と四体液説～
田中 玉美(名古屋大学大学院文学研究科 人文学選考博士前期課程)
6. 薬箱に保存されている生薬「滑石」の原鉱物について
伏見 裕利(富山大学和漢医薬学総合研究所 日本薬科大学漢方薬学科)
7. ある物理学研究室の挑戦-パイロット養成から医療人養成へ- 串田 一樹(昭和薬科大学)

閉会あいさつ

日本薬史学会 2009 年会(金沢)実行委員会 御影 雅幸

(シャトルバス移動)

懇親会 (18:00～19:30) (金沢都ホテル)

〔第2日目〕 11月8日(日)(金沢都ホテル)

学都金沢医薬探訪(金沢駅西口～金沢駅前:09:30～15:00)

09:30 金沢駅西口発～(福久屋石黒薬局)～金沢大学医学部記念館～林鐘庵～12:00 着
つば甚(昼食)13:00 発～13:20 金沢都ホテル着～金沢老舗記念館～(21世紀美術館)～(兼六園)～
旧金沢医学館～湯本求真顕彰碑～(成巽閣)～亀田屋～15:00 金沢駅前(ガーデンホテル前)着
〔 13:20 頃、金沢駅付近に着きます。午後の市民公開講座にご出席を考えている方、
あるいは帰路に就かれる方も、午前中は、この探訪をお楽しみいただけます。 〕

市民公開講座『加賀藩と医薬』(13:30～16:00)(金沢都ホテル)

- ・特別講演Ⅰ 『伝統薬に光』
～アメリカで進む植物性医薬品(Botanical Drug)について～
金沢大学大学院医学系研究科 特任教授 鈴木 信孝
- ・特別講演Ⅱ 『加賀三味薬と幕末・金沢図屏風に描かれた宮竹屋について』
石川考古学研究会 米澤 義光

年会参加申込方法: FAX の場合は、「日本薬史学会 2009 年会(金沢)参加申込書」の項目をご記入の上お送りください。

E-mail の場合は、メール本文に、申込書の項目に沿って記載され送信してください。

なお、事前参加申込につきましては、10月30日をもって締め切らせていただきますが、「学都金沢医薬探訪」につきましては、先着50名様までとさせていただきます。

年会のみの参加申込につきましては、年会当日の受付も可とさせていただきます。

年会事務局：連絡先；(社)石川県薬剤師会 担当；河上 康伸

〒920-0032 石川県金沢市広岡町イ 25-10

TEL；076-231-6634 FAX；076-223-1520

E-mail；kenyaku@plaza-woo.jp

会場へのアクセス

◇ 金沢大学自然科学本館(角間キャンパス)

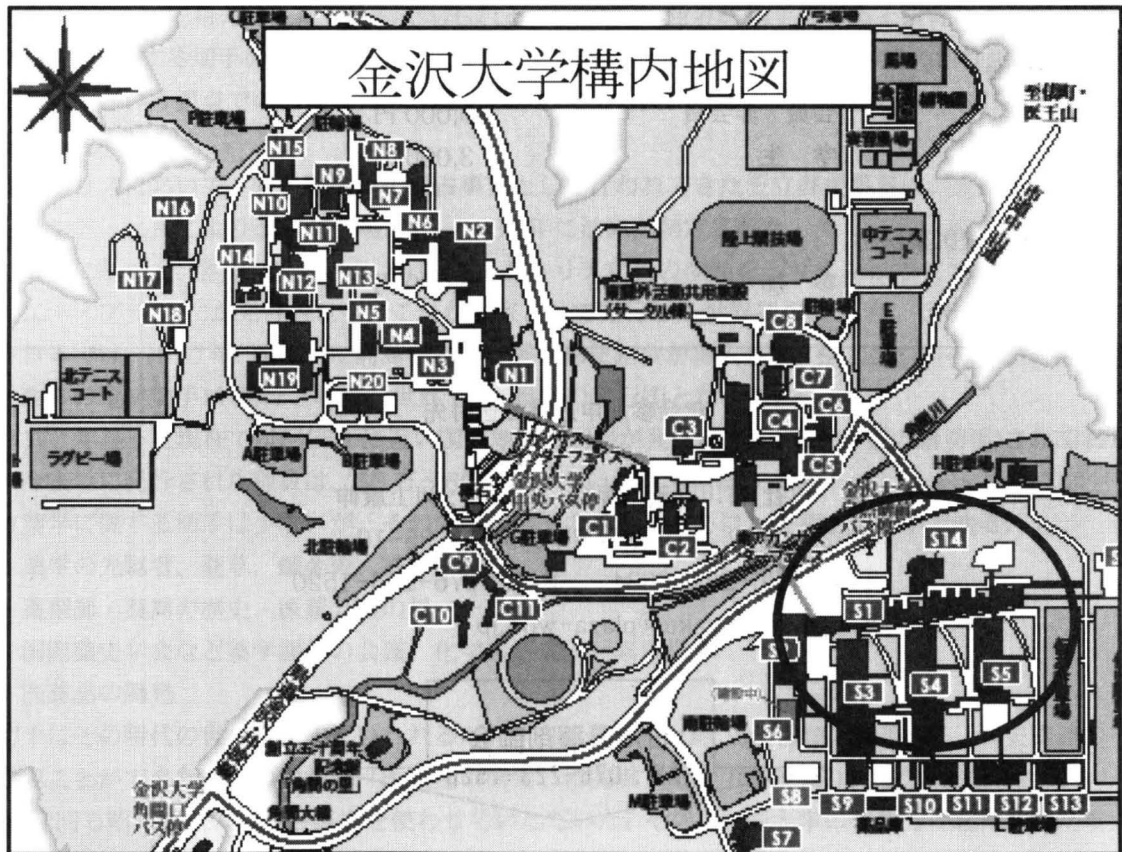
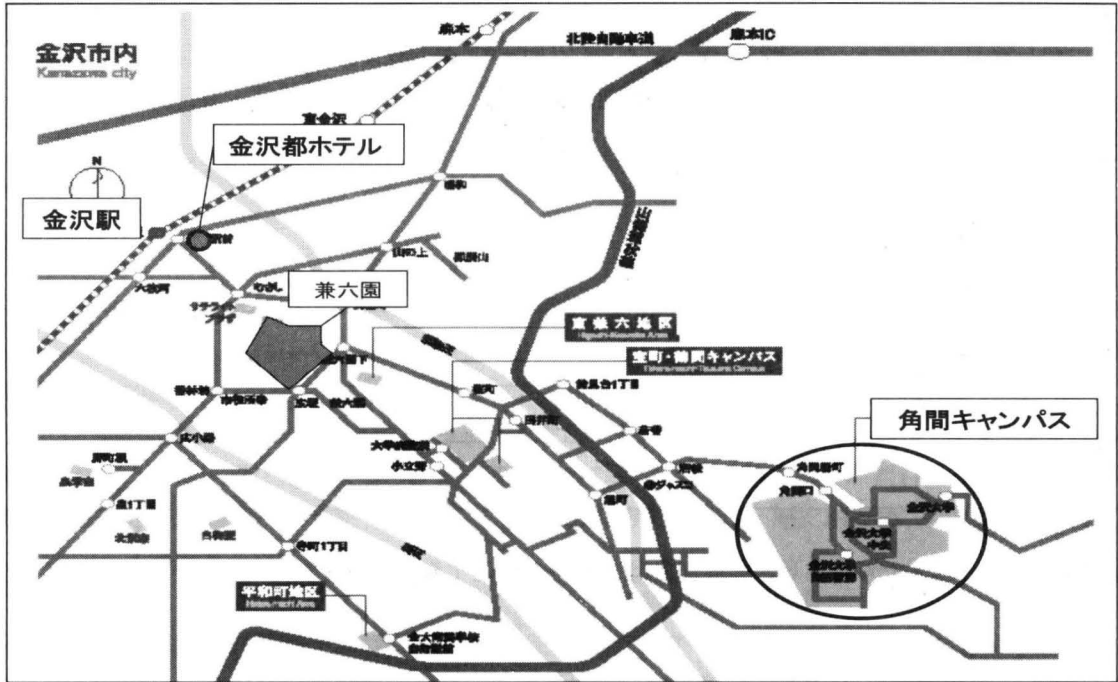
〒920-1192 金沢市角間町

TEL:076-264-5111

<バス停：金沢大学自然研前>まで

金沢駅東口6番乗り場発

93・94・97 金沢大学行き(兼六園下経由)約40分

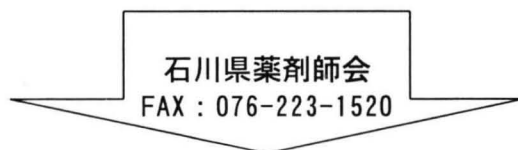


日本薬史学会 2009 年会(金沢)
参加申込書

フリガナ 氏 名															
所 属															
住 所	〒														
T E L		F A X													
E - m a i l															
<p>参加費(○で囲んでください。)(参加費は、当日受付にて徴収します)</p> <p>1. 日本薬史学会年会；</p> <table style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>会 員</td> <td>3,000 円</td> </tr> <tr> <td>非会員</td> <td>5,000 円</td> </tr> <tr> <td>学 生</td> <td>1,000 円</td> </tr> </table> <p>2. 懇親会</p> <table style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>会員・非会員</td> <td>9,000 円</td> </tr> <tr> <td>学 生</td> <td>3,000 円</td> </tr> </table> <p>3. 学都金沢医薬探訪</p> <table style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>参 加</td> <td>6,000 円</td> </tr> </table>				会 員	3,000 円	非会員	5,000 円	学 生	1,000 円	会員・非会員	9,000 円	学 生	3,000 円	参 加	6,000 円
会 員	3,000 円														
非会員	5,000 円														
学 生	1,000 円														
会員・非会員	9,000 円														
学 生	3,000 円														
参 加	6,000 円														

年会参加申込書の送付先

(社)石川県薬剤師会 担当；河上康伸
〒920-0032 石川県金沢市広岡町イ 25-10
TEL；076-231-6634 FAX；076-223-1520
E-mail；kenyaku@plaza-woo.jp



第2回柴田フォーラムの報告

松本 和男

昨年8月4日に薬史学会・柴田フォーラムが発足した。今年は2回目となり、昨年同様8月に昭和大学で開催され、30名が参加した。幸運にも柴田承二先生も出席された。塩原仁子理事の司会進行により開会し、山川浩司会長と柴田承二先生のご挨拶に続き、2題の話題提供があった。いずれも本フォーラムに相応しい内容であり、後の討論・懇親会も活発となり、大変有意義なフォーラムであった。その概要を報告したい。

一つは、東京理科大学薬学部教授の望月正隆先生による「薬学教育改革への薬学部の取り組み」についての講演であった。望月先生は薬学教育論についての第一人者である。それだけに、導入4年目になる6年制学科と4年制学科が混在する薬学部教育のあり方に関して、歴史的経緯、現状分析およびこれからの課題と期待などを熱く語られた。

なお、本講演については、後日、薬史学雑誌に詳しく掲載する予定である。

もう一つは、(財)医薬情報担当者教育センター(MR教育センター)常務理事の平林敏彦先生による「切手で辿る薬学の歴史」のお話であった。平林先生は厚生省、日本製薬工業協会(製薬協)を経て現財団の設立・運営に携われ、医薬情報担当者(MR)の資質と社会的地位向上のために指導的な立場で尽力されている。現在、2012年に6年制薬剤師の誕生やMR誕生100周年となることを踏まえ、MR認定・教育制度の大改正に向け、精力的に取り組んでおられる。その傍ら、世界の切手の収集と研究にも造詣が深く、薬学・音楽に関する切手の著書のほか雑誌にも多くを連載されている。本薬史学会の活性化および視野・裾野の拡大という観点でのお話は大変意義深いものであった。以下、その概要と紹介された切手の一部(写真)を紹介する。

- (1) イギリスにおいて、長い間国王の独占事業として行われてきた王立郵便事業は、大蔵省の役人ローランド・ヒルにより改革が提唱され、1839年に法律が制定された。
- (2) これに基づき、翌1840年5月1日、ヴィクトリア女王の横顔をデザインした1ペニー切手(通称ペニー・ブラック)が発行された。これが国家として発行した世界初の「切手」である。
- (3) 日本では、1870年(明治3)に前島密により近代郵便制度が導入され、翌1871年4月に一番切手(手彫りの竜文切手)が発行された。世界で20番目の発行国となった。
- (4) 170年経った現在では、250に近い国と地域で切手が発行(1年に約1万種の新切手)されており、今までに発行された種数は、50万~60万種ともいわれている。
- (5) 薬学に関する切手は少ないが、その中から以下の事項を中心にした薬史を切手で辿る。
 - ・ 薬学の先駆者、薬草、錬金術、薬学の紋章
 - ・ 薬剤師・薬局の歴史、医薬分業の祖
 - ・ 国際薬史学会など薬学関係の会議、化学構造式、元素周期律
 - ・ 医薬品の開発

切手はその時代の世相を表すといわれるが、今回紹介された約100種類の切手から、薬史関連の一端を学ぶことができた。その中から「医薬品の開発」に関係する切手の写真(17種類)を紹介する。

謝辞:今回も昭和大学の病院会議室を使わせていただいた。その上、同大学の先生方に細部にわたり大変お世話になった。厚くお礼申し上げたい。

①アルカロイド
ジギタリス



ペルー国旗 (キナノキ)



キニーネ発見 150 年



②アスピリン
アスピリン 100 年



ドイツ製薬協会 100 年 (アスピリン分子モデル)



③病原微生物
パスツワール



コッホ



④通仙散・オリザニン・アドレナリン

華岡青洲

鈴木梅太郎

高峰讓吉



⑤サルバルサン

エーリッヒ/秦佐八郎



⑥抗毒素血清

ベーリング/北里柴三郎



⑦インシュリン

藤原道長

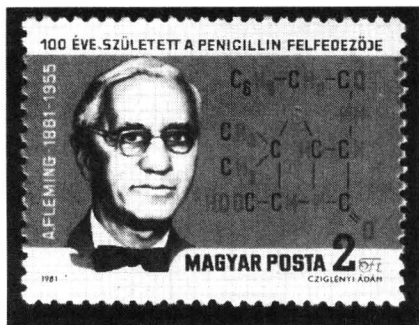


バンディング/ベスト



⑧ペニシリン

フレミング



国際化学療法学会 (ウィーン)



家伝薬保護についての意見(2009年9月)

服部 昭

先程、私は薬史レター51号(2009年1月)に厚生労働省の医薬品通信販売規制にかかわり、家伝薬の保護について意見を述べた。その後、2009年3月に続報を投稿したが、学会誌に掲載されなかったもので、情勢の変化も鑑み、ここに内容をやや改めて、第3報として見解を述べる。

家伝薬、漢方処方薬の通信販売規制について、厚生労働省は省令施行の直前に暫定措置を発表した。患者の不便解消、企業の既得権益を保護するという立場もあって、まさしく、これは一時しのぎの暫定措置であり、当然、改革を必要とする内容である。

これに対して、家伝薬の協議会の一部の会員は、行政の指導もあったのか、期限間際に特例販売業によって対処するという、これまた理解に苦しむ姑息な対応に走り、販売体制を維持している。残念ながら、このままでは家伝薬の将来が危ない。これも改革を必要としている。

もともと、この規制そのものについては、種々意見もあろうが、安全性の見地より、対面販売を強調するものであり、一般論としては結構なことである。

問題は、なにもかも一律に通信販売を全面禁止することにある。この点については、通信販売の比重の高い家伝薬、あるいは漢方処方薬の場合は、患者を把握して、濃密な会話が行われているので、規制対象から外すべきではないかと考えている。

通信販売禁止という措置が、家伝薬製造販売業者を存廃の瀬戸際に追い込んでいるという現実を無視することはできない。だからこそ、今、家伝薬保護が必要ではないかと案ずるのである。家伝薬を文化財というような骨董品でも扱うごとく気楽な立場で第三者が論じることは失礼でもあり、許されない。家伝薬を文化財と同一視することは難しい。それは、家伝薬そのものが、製造販売業者にとっては重要な営業品目であり、立派に企業の生命を保っているからである。企業にとってはこれらの商品が経営の基盤でもあって、家伝薬の存廃には利害関係というものがああり、軽々しく扱って欲しくないという一面がある。

家伝薬＝文化財ではなく、ここでは文化財的な立場での保護という観点から取り上げる。

1. 家伝薬の定義

過去においてもこの家伝薬保存の問題は私的な研究会が設けられるなど、保護が問題になった形跡はあるが、私の調べた範囲内では残念ながら、この研究会の活動の実態は不明である。

家伝薬あるいは伝統薬、伝承薬と類似の名称はあるが、それらの概念は必ずしも明白ではない。ここでは家伝薬という名称を用いるが、家伝薬とは古くは江戸時代、または、それ以前に起源を持つものもあり、そんなに古くなくても明治、大正、昭和の世のいずれかに起源をもち、製造者に伝わる処方、製法を連綿と守り、製造販売を続けている医薬品が対象になっている。

定義づけるに当たっての問題点は次の通りである

- ①製造販売開始、すなわち、起源をどの時点におくか。
- ②処方古来の漢方にあり、成分は生薬だけに限定するか、あるいは、西洋薬(化学物質)も含むべき

か。

③近代の製薬メーカーが承継して品目の処方、製法に伝統が守られている場合は、それは含まれるか。ただし、家伝というイメージからは離れる。

④古来の漢方処方品であって、起源は古い一般的な存在で、本家が存在しないか、もしくは本家とは関係なく、まったく別の参入者の製造するものも、対象となすべきか。

これらの問題点については、さらに検討を重ねてゆきたい。ご示唆いただければ幸いである。

本欄での家伝薬とは一応、起源は明示しないで、漢方処方にて、企業家に伝わる処方、製法を守って製造販売が連綿と続けられている医薬品ということにしておく。

2.文化財としての価値

文化財という考え方で、この家伝薬の保護を考えた場合、文化政策のうえで国民にどのような利点をもたらすかということがある。

単にノスタルジアで、古いものを敬い、大事に残そうというだけでは、骨董品を扱うのと同じで意味がない。家伝薬は生きているのである。これを残すことによって、国民は、子孫はどういう利益を得るだろうか。

社会的存在としての文化財、とくに公共財たりうるか、ということである

文化財では保護という用語を用い、「保存」と「活用」を考えねばならないと文化政策を専門とする根本昭氏はいふ。

保存とは「従来、われわれの祖先が守り伝えてきたものをここに至って滅ぼすことのないように十分の配慮をもって維持管理することである」。

活用とは「それらのものをただ収蔵、放置するのみでなく、保存に支障のない手法をもって、現代の国民に公開するなどの措置を講じ、その有する価値を新しい文化の創造、文化的向上のために発揮させること」。

このような立場で家伝薬をまな板に載せたとき、これらに家伝薬が十分、耐えうるかという点を考えねばならない。日進月歩の医療の世界にあって、医薬品は他の商品とは異なり新旧交代の激しい一面はある。しかし、漢方薬が3千年、4千年にわたる歴史の洗礼を浴びて、いまなお、第一線にあることを認識すれば、このあたりが、むしろ、家伝薬の新しい文化の創造に寄与するところになる。最新であることだけが医療ではなく、家伝薬の過去から未来にわたる展望も、新しい医学の道を開く可能性がある。

家伝薬には、文化財的な立場での保護対象として適合すると私は解釈する。

3.家伝薬を援助する施策

つい先日も、かつて家伝薬の中に取り上げられていた610(ムトウ)ハップが硫化水素自殺に利用されているというので、販売中止に追い込まれ、企業は余儀なく撤退せざるを得ないというところにまで追い詰められた。まことに嘆かわしい。昭和のはじめから築いてきた貴重な財産が、不当な圧力で消え失わせてしまうとは残念な出来事であった。

日本薬史学会では、現存の店頭にある商品を研究対象にするには公平な評価という点では好ましくない場合がある。かといって、長年、歴史的に存在してきた商品の存在価値が危なくなってきたときに、それを放置しておいていいものかという問題がある。昆虫研究のように、採集して死骸だけを研究対象にするのが薬史学でもないであろう。

家伝薬の保護という点では、たとえば、次のようないろいろな施策が考えられる。

- ①歴史遺産が破壊されようとしているときには、これを護るという立場から積極的に発言して、行政、国民に訴える。
- ②家伝薬にかかわる貴重な資料を集めて、技術、材料、機械などの記録集を発行する。当然、発売中止品目も含まれる。
- ③家伝薬の集中販売所を設ける。ちょうど地方の小規模出版社が連携して、全国的な販売網を築いているのは参考になる。販売所を都会に設ける。
- ④家伝薬の承継について相談にのれる態勢を作る。
- ⑤家伝薬の製造販売を中止する際には、保存資料の散逸を防止する。
まとめて移設が出来るよう関連博物館施設への斡旋をする。

これらのうち、研究団体の学会としては①、②の項目がさしあたり求められる。また、会員の研究課題としても対象になりうる。学会としての当面の仕事は家伝薬保護の国民への PR、その価値を啓蒙することにある。

“オピニオン” 欄の開設について

編集部より

本会は薬史についての学術的研究に関して「薬史学雑誌」と「薬史レター」（薬史学会通信改題）を発行してきました。最近、薬事についての社会的な発言を求めめるご意見を発表する会員の声がありましたので、このたび、「薬史レター」に“オピニオン”欄を設けました。今後、多数の会員のご意見を編集部にお寄せ下さる様お願い致します。

但し本欄の内容は寄稿者の責任に於て執筆された寄稿者個人のレターであって、本会としての意見ではありません。

◆北海道支部だより

北海道医史学研究会・日本薬史学会北海道支部の第4回合同学術集会が去る9月5日(土)に札幌市内のAKKビルで14時より開催された。

薬史学会北海道支部の斎藤元護支部長、北海道医史学研究会の長瀬清会長の挨拶に引き続き、相見則郎千葉大学名誉教授より正倉院薬物「冷葛(やかつ)」についてと題する特別講演が行われた。

一般演題 I (薬史関係)

1. 新聞に見る北海道の売薬広告(Ⅱ)世相を反映する売薬広告 本間 克明((株)北海道医療総合研究所)
2. 星一によるわが国初のキニーネ製造と輸出事業(Ⅱ)キニーネと世界情勢
○山 朝江(やま内科胃腸科)、三澤 美和(星薬大)
3. 平成21年度改正薬事法と薬局の変遷について 有澤 賢二(屯田七条薬局)

一般演題 II (医史関係)

1. 北海道大学医学部旧本館のモデルとレリーフについて ○寺沢 浩一(北大医学研究科)、池上 重康(北大工学研究科)、藤垣 エミリア(札幌国際大・短期大)
2. 蝦夷地の医療(Ⅲ) ○島田 保久(元町整形外科)、片岡 是充(宮の森記念病院)、菊田 道彦(北海道医史学研究会)
3. 札幌病院初代院長澁谷良治の肖像写真をめぐって ○宮下 舜一(北海道医史学研究会)、菊田 道彦(北海道医史学研究会)

終わりに北海道医史学研究会の島田保久代表幹事の閉会挨拶があつて懇親会に移った。参加者は34名であった。